ユーフォルビア ギラウミニアナの育て方

Euphorbia guillauminiana

トウダイグサ科 / Euphorbiaceae

> 太く肌のきれいな淡灰色の幹から傘のように枝を広げ、光沢のある縁がピンク〜白の葉をまとう、マダガスカル北西部の希少な落葉性ユーフォルビア。乾季に葉を落として枝の造形が際立ち、実生では「分頭（頭割れ）」しながら群れ育つ姿がコレクター心をくすぐります。

基本データ	
成長期	夏型（春〜秋生育、乾季＝冬に落葉して休眠）
耐寒温度	目安5〜10℃を下回る前に室内へ（欧州の専門ナーサリーは5〜8℃以上を推奨）。冬は霜・低温＋湿りの組み合わせを避ける
日照	強光〜直射（1日3時間程度の直射で栽培例あり／室内はLED育成灯）。幼苗・順化不足の株は葉焼けに注意
播種適期	4〜6月（気温が上がってから）
発芽日数	発芽適温25〜30℃で、適湿・腰水なら約11日で発芽した記録あり（発芽率は不安定）
主原産地	マダガスカル北西部アナララバ県（ポールベルジェ周辺）の玄武岩の岩場
難易度	

概要・魅力

Euphorbia guillauminiana（ユーフォルビア・ギラウミニアナ）は、マダガスカル北西部・アナララバ県のポールベルジェ周辺に自生する、落葉性の多肉低木状ユーフォルビアです。フランスの植物学者ピエール・ルイ・ボワトーによって記載されました。トウダイグサ科（Euphorbiaceae）ユーフォルビア属に属し、マダガスカルが誇る多肉ユーフォルビアの一つです。

最大の魅力は、その独特の株姿にあります。太く肌のきれいな淡灰色の幹が地際近く（高さ約10cm）で分岐し、そこから多数の太い横向きの枝を傘のように広げます。枝には8列に並ぶ棘があり、枝先には光沢のある濃緑色で縁がピンク〜白に彩られた卵形の葉がロゼット状に密生します。この幹・枝・葉が織りなす造形は、多肉植物・コーデックス愛好家の心を強くとらえます。

- **太く淡灰色の幹（コーデックス）**：肥大した茎が乾季に備えて水分・養分を貯えます。
- **縁がピンク〜白の光沢葉**：花のように見えることがありますが、これは**葉の縁の色**です。花（正確には花を包む苞）は**黄色〜黄緑色（まれに赤）**で、主に春に咲きます。
- **乾季に葉を落とす落葉性**：葉を落とすと枝ぶりの造形がいっそう際立ちます。
- **実生ならではの「分頭」**：種から育てると、成長点が割れて枝分かれしながら群れ育つ姿が楽しめます。

自生地が玄武岩地帯のごく狭い範囲に限られる希少種であることも、コレクション性を高めています。一方で、ユーフォルビア属の中では栽培難易度が高い部類とされ、特に休眠期の水やりに敏感な点は、育てる前に知っておきたいポイントです。

> 取り扱い注意：本種を含むすべてのユーフォルビアは、切り口や傷から**白い乳液（ラテックス）**を出します。この乳液は皮膚・粘膜・目に炎症や刺激を起こすため、剪定・植替え・株分けの際は必ずゴム手袋を着用し、目・口・鼻に触れないようにしてください。子どもやペットの手の届かない場所で管理しましょう。

SEEDSTOCKでは、こうした希少種を種子から育て上げる面白さこそコーデックス栽培の醍醐味だと考えています。次項から、失敗しないための管理の基本を順に見ていきましょう。

© 2026 SEEDSTOCK

置き場所

Euphorbia guillauminianaは強い日ざしを好みます。自生地は日当たりの強い岩場ですので、生育期（春〜秋）は屋外のよく日の当たる、風通しのよい場所で管理するのが基本です。日照が不足すると枝が間延びし、本種らしい締まった枝ぶりが崩れてしまいます。

室内で育てる場合は、明るい窓辺に加え、LED育成灯を併用すると徒長を防げます。株から20cmほどの距離でLEDを当て、葉焼けなく管理できた栽培例もあります。ただし、室内から屋外へ急に出したときや、実生・幼苗、順化が不十分な株では葉焼けが起こりやすいので、1〜2週間ほどかけて徐々に光に慣らしてください。

季節ごとの管理の目安は次のとおりです。

- **春**：気温が安定してきたら灌水を再開し、展葉・植替えの適期です。
- **夏**：よく生育しますが、真夏の高温期は成長が鈍る時期もあり、その際は水やりを控えめにします。
- **秋**：生育が徐々に鈍化します。気温の低下に合わせて水やりを絞っていきます。
- **冬**：葉を落として休眠します。**最低気温が5〜10℃を下回る前に室内へ取り込み**、暖かく乾かし気味に管理します。

耐寒性については情報に幅がありますが、マダガスカル北西部の温暖な乾燥地に自生する種であることを踏まえ、安全側で考えるのが無難です。欧州の専門ナーサリーは5〜8℃以上の確保を推奨し、日本の栽培者は10℃を下回る前の取り込みを勧めています。一部の海外サイトにはより低温に耐えるとの記述もありますが、本種の生態と整合しないため、本ガイドでは採用していません。**「寒さ」そのもの以上に「低温と湿り気の組み合わせ」が危険**ですので、冬は霜を避け、乾燥状態で越冬させてください。

水やり

本種の栽培でもっとも重要なのが水やりです。Euphorbia guillauminianaは夏型で、生育期（春〜秋）と休眠期（冬）とで水やりを大きく切り替えます。**休眠期の過湿が、この種を枯らす最大の原因**だと覚えておいてください。

生育期（春〜秋）

用土の表面が乾いてから数日おいて、鉢底から流れ出るまでたっぷりと与えます。「少量をこまめに」ではなく、乾湿のメリハリを意識しましょう。幹（塊茎）が育って径2cmを超える頃には乾燥への耐性も増してきます。ただし真夏の高温で成長が鈍る時期は、水やりを控えめにするのが安全です。

休眠期（冬・落葉期）

本種は**休眠中の水やりに極端に敏感**です。欧州の専門ソースは「休眠期は用土を完全に乾かす（断水）」ことを強く勧めており、過湿はそのまま根腐れ・株の崩壊に直結します。**原則は乾かし気味〜断水**で管理してください。

> ただし運用には幅があります。本種は根が比較的弱いため、日本の栽培者の中には「完全断水では細根が枯れやすい」として、冬も月1回程度、ごく軽く湿らせる程度の水やりで細根を守る方もいます。完全断水にするか、ごく軽い灌水にとどめるかは、**株のサイズ・室温・鉢の乾き方**によって判断してください。いずれにしても、たっぷり与えるのは禁物です。

排水性の高い用土と、メリハリのある灌水がすべての前提になります。水を欲しがっているように見えても、休眠期は「乾かし気味を守る」ことがこの種を長く育てるコツです。

用土・植替え

自生地が玄武岩の岩場であることからもわかるとおり、Euphorbia guillauminianaは**排水性を最優先**にした用土を好みます。水はけの悪い用土は、休眠期の過湿とあわさって根腐れの直接の原因になります。

用土の配合例は次のとおりです。

- **日本での実例**：赤玉土・鹿沼土・パーライトを主体に、少量の堆肥と緩効性肥料（マグァンプなど）を混ぜる配合。以後は春・秋に緩効性肥料を表面へ少量追肥します。
- **手軽な選択肢**：市販のサボテン・多肉植物用の培養土。または通常の培養土に砂とパーライトを等量ずつ加えて排水性を高めたもの。

鉢は素焼き鉢やスリット鉢など、通気性・水はけのよいものが管理しやすくおすすめです。

植替えの適期は、休眠明けの**春**です。成長が鈍い種なので頻繁な植替えは必要ありませんが、根詰まりや水はけの悪化を感じたら植え替えます。作業では傷んだ根を整理し、**植替え前後の数日〜1週間ほどは水やりを控えて**、根の傷みからの腐敗を防ぎます。

> 植替えで根や茎を傷つけると、白い乳液（ラテックス）が出ます。皮膚や目への刺激を避けるため、必ずゴム手袋を着用し、作業後は手をよく洗ってください。

発芽のさせ方

Euphorbia guillauminianaは種子の流通が非常に少なく、市場に出る種子の多くは個人栽培家の自家採取品です。それだけに、実生で発芽・育成を成功させたときの喜びは格別です。本種は栽培下でも比較的よく開花・結実し、2株あれば採種できたという記録もあります。以下は日本の実生栽培記録に基づく手順ですが、種子のサンプル数が少ないため、数値はあくまで目安として捉えてください。

1. **播種時期を選ぶ**：気温が上がる春〜初夏（目安4〜6月）が適期です。栽培記録では4月・6月に播種した例があります。
2. **種子を前処理する**：発根活力剤と殺菌剤の希釈液に半日ほど浸す、あるいは殺菌剤液に数時間浸すといった前処理で、吸水を促し、カビや立ち枯れ（溶化）を予防します。

3. **清潔な用土を準備する**：赤玉土やパーライトなど排水性のよい細粒用土を用意し、熱湯などで殺菌して無菌に近い状態にします。古土の使い回しは避けましょう。
4. **播種する**：湿らせた用土の表面に種子が重ならないようまきます。覆土は「種が隠れる程度」にごく薄く。深く埋めないのがポイントです。
5. **腰水で湿度を保つ**：腰水（底面給水）にして、発芽までは高い湿度を保ちます。上からの水やりは種子や発根したての根を傷めるため避けます。
6. **温度を管理する**：発芽適温は**25〜30℃**が目安です。一般的な夏型多肉より高めの温度で管理した記録があります。直射日光は避け、明るい場所に置きます。
7. **発芽を待つ**：適温・適湿・腰水を保てば、**約11日で発芽**した記録があります。ただし発芽率は不安定で、数粒まいて一部しか発芽しないこともあります。
8. **発芽後は徐々に順化する**：子葉が開いたら少しずつ光に当てていきますが、急に強い直射に当てると初期の葉が褐変・落葉することがあるため、徐々に慣らします。本葉は約20日、棘は約1ヶ月ほどで現れます。腰水から通常管理へは、通気を増やしながら段階的に移行します。
9. **薄い施肥で育てる**：ある程度育ったら、薄めた液体肥料などで少しずつ栄養を補います。

この種の実生ならではの見どころが「分頭（頭割れ）」です。成長点が割れて枝分かれし始める時期には、播種後4〜5ヶ月という記録から約14ヶ月という記録まで幅がありますが、この枝分かれこそ本種を種から育てる醍醐味です。1年目は旺盛に育ち、以降は成長が緩やかになります。SEEDSTOCKの種子から、あなたの手で幹の太る一株を育て上げてみてください。

病害虫・トラブル

根腐れ（最重要）

Euphorbia guillauminianaでもっとも警戒すべきトラブルが根腐れです。過湿・通風不良・そして休眠期の水やりが主な原因で、株元が軟らかくなる・黒変するといった症状が現れます。本種は特に休眠期（冬）の過湿に弱いため、**冬は乾かし気味〜断水を徹底し、風通しを確保する**ことが最善の予防策です。株元の異変に気づいたら、鉢から抜いて腐敗部を切り取り、切り口を乾かしてから清潔な用土に植え直します。

実生時の溶化（立ち枯れ）

発芽した苗が途中で溶けるように傷んで消えてしまうことがあります。無菌に近い用土の使用、種子の殺菌前処理、そして過湿の回避が予防になります。腰水期間中も通気を意識しましょう。

葉焼け

実生・幼苗や、室内から急に強い直射へ移した株では、葉に褐変が出たり落葉したりすることがあります。1〜2週間かけて徐々に光に慣らすことで防げます。

害虫

- **カイガラムシ・コナカイガラムシ**：室内での越冬時や通風不良の環境で発生しやすく、葉の付け根などに白い綿状の塊として現れます。綿棒やピンセットで物理的に取り除き、広がっていれば薬剤で対処します。
- **ハダニ**：高温乾燥期に発生し、葉が白くかすれます。葉水や洗い流しで予防します。
- **ネジラミ（根粉カイガラムシ）**：根に寄生し気づきにくいため、植替え時に根を確認し、付いていれば水洗いして対処します。

取り扱い注意：白い乳液（ラテックス）

剪定・植替え・分頭株の切り分けなど、株を傷つける作業では白い乳液（ラテックス）が出ます。この乳液は皮膚・粘膜・目に炎症や刺激を起こすため、**必ずゴム手袋を着用し、目・口・鼻を触らない**ようにしてください。付着したら流水と石鹸で洗い流し、目に入った場合はただちに眼科を受診しましょう。作業は子ども・ペットの手の届かない場所で行ってください。

本種はもともと栽培難易度が高めの種です。

🖊️ 栽培メモ

ユーフォルビア ギラウミニアナの種子を探す

QRを読み取る／seedstock.jp